

# 春に朗詠

## 生田緑地において

令和七年春 桜井真樹子

生田緑地の桜の咲く頃に、白拍子をやらせて頂ける興奮に、白拍子が歌い舞うさまさまな情景を心に浮かべました。日本で一番美しい日々、それが花々がほころびる春でしょう。春が訪れる喜び、春が去る寂しさは、昔から多くの詩人たちの心を打ち、歌に詠まれてきました。

『和漢朗詠集』<sup>わかんろうえいしゅう</sup>は、漢文、漢詩、和歌といった詩を、実際に声に出して朗読するために平安中期に成立しました。なお、白拍子は平安後期まで内教坊という宮中で歌舞<sup>うたまひ</sup>の訓練を積んだ女性たちが、内教坊の閉鎖によって、一般社会に出て歌い舞い始めた。パフォーマー(演技者)のことで

す。  
今回の企画は、白拍子がこの『和漢朗詠集』の詩を紐解いていくというアイデアから生まれました。

そのきつかけを与えてくれたのは、同集に収められている菅原文時<sup>すがわらのふみとき</sup>の71番歌でした。この歌は「西楼に月落ちて花の間の曲中殿に燈残つて竹の裏の音」という情景を詠み、「残物白拍子」という題で、金沢文庫に歌詞として資料が残っているのです。

『和漢朗詠集』は四季ごとに歌が分かれており、春の部では「立春」「早春」「春興」「春夜」「暮春」など、春の始まりから終わりまで様々な情景が描かれています。また、中国唐代の偉大な詩人と、日本の詩人の両方の作品が収められており、両国の詩を知ること、歌を深く味わい、感じる事ができます。

まず劉禹錫<sup>りゅううしやく</sup>(772~842)の「野原の草花は二面に咲きみちています」という詩と、これを和歌にした小野篁<sup>おののたかむら</sup>(802~853)の作品。そして李白<sup>りはく</sup>(701~762)の「春を引き止めようとしても春は留まってくれません」という詩を取り上げます。また、李白の詩については、香港中文大学の蕭振豪先生のご協力を得て、唐代の発音と抑揚を復元し、その音に合わせた旋律を作り出しました。さらに、その発音を日本の漢音<sup>かんおん</sup>に変換して作品を作ります。さらに漢文を書き下ろした和歌にも作曲します。これら三つのスタイルで音楽と振り付けを構成しています。

また、当時の中国文学に精通し、日本でも高い評価を受けた菅原道真<sup>すがわらのみちざね</sup>(845~903)の歌「晩春の老鶯<sup>ろうわう</sup>と落花が春を送っています。春よ最後に私の家に泊まりにきませんか？」を、雅楽の『春庭花<sup>しゅんていかに</sup>』の旋律に合わせて歌い舞います。作曲の方法について。たとえば、李白の詩に出てくる唐代の発音での「春(chwinチユン)」という音と抑揚から旋律を作り、日本人が漢字を読む「春(shinシン)」も、唐代の発音と抑揚を元に旋律を作りました。さらに訓読みの春(はる)も、唐代の発音と抑揚面影を残しつつ旋律を作りました。

現代では、和歌は単に朗読されることが多いですが平安時代の詩人や白拍子たちがどのように歌っていたのか、ということ想像しつつ、しかし復元という形ではなく、新たな創作として今回の演目を作りました。それは、唐代の中国語と日本語を自由に使いこなしていた当時の日本の歌人、舞人の感性や遊び心呼び覚ますものでした。唐代の発音が、漢音読みや訓読みになることによって、音の高さやリズム、テンポの変化が変化してゆくのを楽しんでいただい

のでしょうか。  
どうぞ、平安時代の詩人や白拍子たちと共に、春に遊び、春に楽しみ、春の息吹を感じながら楽しいひとときをお過ごしください。

